

神現祭

晩堂大課

早課

名古屋ハリストス正教会

2015

晩 堂 大 課	「我等の神は崇め讃めらる」		時課経P201
	天の王、聖三祝文～天主経		時課経P201
	来たれ		時課経P203
	聖詠、4、6、12、(24、30、90)		時課経P204
	「神は我等と偕にす」		時課経P216
	「主よ光を送りて」		時課経P220
	「無形の性のヘルビムは」		時課経P220
	信経「我信ず」		時課経P222
	「至聖なる生神女や」		時課経P224
	聖三～天主		時課経P225
	祭日トロパリ		時課経P225
	主憐れめよ、40次		時課経P229
	ワシリーの祝文「主や、主や」		時課経P230
	来たれ		時課経P231
	聖詠、50、(101)		時課経P232
	マナシアの祝文「主全能者」		時課経P237
	天の王、聖三祝文～天主経		時課経P240
	祭日コンダク		祭日経
	祝文「主宰神父全能者」		時課経P242
	来たれ		時課経P242
	聖詠、69、142		時課経P242
	「至高き」		時課経P245
	リティヤのスティヒラと	晩課の終わりと同じ	祭日経
	リティヤ		奉事経
	挿句のスティヒラ		祭日経
	シメオンの祝文		時課経P191
	聖三祝文～天主経		時課経P192
	トロパリ 3回	祭日のトロパリ	祭日経
	五餅の祝福		
	祈祷の終わり		奉事経
	33聖詠(1～10節)		時課経P197
	司祭祝福		

降誕祭 晩堂大課

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

誦経 **【天の王】**

天の王、慰むる者よ、真実の神[°]、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来たりて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

誦経 **【聖三祝文】[至聖三者][天主経]**

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光荣は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

来たれ、我等の王・神に叩拜せん。

来たれ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

来たれ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

誦経 **第4聖詠**

吾が義の神よ、我がよぶ時、我に聴き給へ。我が^{せまき}狭に在る時、爾我に^{ひろき}廣を與へたり。我を憐みて、我が^{さかえ}祷を聴き給へ。人の子よ、我が^{はずか}榮の辱しめらるること何の時に至るか、爾等^{むなしき}虚を好み^{いつわり}詭を求むること何の時に至るか。爾等主が^{その}其聖者を^{わか}析ちて己に属せしめしを知れ、我よべば、主は之を聴く。怒りて罪を犯す母れ、榻に在るとき爾等の心に謀りて、己を鎮めよ。義の祭を獻げて、主を^{たの}恃め。多くの者は言ふ、誰か我等に善を示さん。主よ、爾の^{かんばせ}顔の光を我等に顯し給へ。爾の我が心に^{たのしみ}樂を満つるは、彼等が餅と酒と油とに豊なる時より勝れり。我安然として^ふ偃し寝ぬ、蓋主よ、独爾は我に無難にして世を渡らしめ給ふ。

第 6 聖詠

主よ、爾の^{いきどおり} 憤^{いかり} を以て我を責むる母れ、爾の^{いかり} 怒^{おのの} を以て我を罰する母れ。主よ、我を憐み給へ、我弱ければなり、主よ、我を^{いや} 醫^{ほね} し給へ、我が骸は^{おのの} 慄^{はなはだおのの} き、我が霊も^{はなはだおのの} 甚^{なげき} 慄^{つか} ければなり、爾主よ、^{いづれ} 何^{おもて} の時に至るか。主よ、^{おもて} 面^{かえ} を轉し、我が霊を免れしめ、爾の憐に由りて我を救ひ給へ。^{けだし} 蓋^{うち} 死^{うち} の中には爾を記憶するなし、墓^{うち} の中には誰か爾を讃揚せん。我^{なげき} 嘆^{つか} にて憊れたり、毎夜我が^{まいや} 榻^{とこ} を滌^{あら} ひ、我が^{しとね} 涙^{しとね} にて我の^{しとね} 褥^{しとね} を濡す。我が眼は憂に因りて枯れ、我が諸の敵に因りて衰へたり。凡そ不法を行ふ者は我を離れよ、^{けだし} 蓋^{けだし} 主は我が泣く声を聞けり、主は我が^{ねがい} 願^{ねがい} を聴き給へり、主は我が^い 祷^い を納れんとす。願はくは我が諸の敵は^{はずか} 辱^{はずか} しめられて痛く撃たれん、願はくは退きて^{にわか} 俄^{はじ} に愧を得ん。

第 12 聖詠

主よ、我を全く忘るること^{いづれ} 何^{いづれ} の時に至るか、爾の^{おもて} 面^{おもて} を我に隠すこと^{いづれ} 何^{いづれ} の時に至るか、我が己の^{うち} 霊^{うち} の中に謀り、心の中に^{うれい} 日夜^い 憂^い を懷くこと^{いづれ} 何^{いづれ} の時に至るか、我が敵の我に高ぶること^{いづれ} 何^{いづれ} の時に至るか。主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を^{あきらか} 明^{あきらか} にして、我を死の^{ねむり} 寐^い に寝ねざらしめ給へ、我が敵が我は彼に勝てりと曰はざらん為、我を^{うご} 攻^{うご} る者が我の^{うた} 撼^{うた} く時に喜ばざらん為なり。我爾の憐を^{たの} 待^{たの} み、我が心爾の救を喜ばん、我恩を施すの主を^{うた} 讃^{うた} め頌ひ、至上なる主の名を崇め歌はん。

主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を^{あきらか} 明^{あきらか} にして、我を死の^{ねむり} 寐^い に寝ねざらしめ給へ、我が敵が我は彼に勝てりと曰はざらん為なり。

誦経 光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光荣は爾に帰す。(三次、躬拜三次)

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

第 24 聖詠 第 30 聖詠 第 90 聖詠

(司祭は王門前に出てくる)

司祭 神は我等と^{とも} 偕^{とも} にす、異邦人よ、^{これ} 此^{これ} を知りて従へよ、神我等と^{とも} 偕^{とも} にすればなり。(イザヤ 8:9-9:7)

(詠) 神は我等と^{とも} 偕^{とも} にす、異邦人よ、^{これ} 此^{これ} を知りて従へよ、神は我等と^{とも} 偕^{とも} にすればなり。



司祭 地の^{はて} 極^{はて} までも^{これ} 之^{これ} を聴け、

司祭 権力ある者よ、従へ、

司祭 ^{またいきおい} 復^{また} 勢^{また} を張らば、復敗られん、

(詠) 神は我等と^{とも} 偕^{とも} にすればなり。

(詠) 神は我等と^{とも} 偕^{とも} にすればなり。

(詠) 神は我等と^{とも} 偕^{とも} にすればなり。

司祭	はかりごと 謀 ^{はかりごと} を設けば、主は之を毀 ^こ たん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	ことば 言 ^{ことば} を出さば、必 ^{かならず} 成らざらん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	爾等の畏るる所は我等畏れず、驚かず、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	主我が神を以て聖と為す、彼は我が畏 ^{おそれ} とならん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	我彼を頼まば必ず我を聖にせん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	我彼を望み、彼に因 ^よ りて救を得ん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	視 ^み よ、我及び神が我に與 ^{あた} へたる諸子は此に在り、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	くらやみ 幽冥 ^{くらやみ} の中を行く民は大なる光を見たり、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	死の蔭 ^{かげ} の地に居る者よ、光は爾等を照らさん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	けだしおきなご 蓋 ^{けだしおきなご} 嬰 ^{おなご} は我等の為に生れ、子は我等に賜はりたり、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	権柄 ^{その} は其肩に在り、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	其 ^{その} 和平は終 ^{おわり} なし、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	其名 ^{その} は大なる議事の使者と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	神妙なる議士と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	大能の神、主宰、和平の君と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	来た世の父と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	神は我等と偕 ^{とも} にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	光榮は父と子と聖神 [°] に歸す、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	今も何時 ^{いつ} も世世に、「アミン」、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。

(もう一度繰り返し)

(詠) 神は我等と偕^{とも}にす、異邦人よ、此^{これ}を知りて従へよ、神は我等と偕^{とも}にすればなり。

誦經 主よ、日を送りて爾に感謝す、救世主よ、求む、我に罪なく暮と夜とを度^{わた}らしめて、我を救ひ給へ。

光榮は父と子と聖神[°]に歸す。

主宰よ、日を送りて爾を讚榮す、救世主よ、求む、我に誘^{いざない}なく暮と夜とを度^{わた}らしめて、我を救ひ給へ。

今も何時^{いつ}も世世に、「アミン」。

聖なる者よ、日を送りて爾を讚頌す、救世主よ、求む、我に無難に暮と夜とを度^{わた}らしめて我を救ひ給へ。

無形の性のヘルウィムは息めざる歌にて爾を讃め揚げ、六翼^{りくよく}の造物セラフィムは絶えざる声にて爾を尊み歌ひ、天使の萬軍は聖三の歌にて爾を崇め讃む、蓋^{けだし}爾は萬有の先より自ら存する父にして、同無原なる爾の子を有^{たも}ち、同尊なる生命の神^{いのち}を出し、三位^{いだい}の分れざるを顯し給ふ。

至聖なる童貞女・神の母と、親しく聖言を見て之^{これ}に役めし者と、預言者及び致命者の群よ、

死せざる生命^{いのち}を有^{たも}つに因^よりて、我等の為に切に祈り給へ、我等皆苦難^{うち}の中に在ればなり。
願はくは我等凶惡^{いざない}の誘^{のが}を遁^{のが}れて、天使の歌を歌はん、聖、聖、聖なる三聖の主よ、我等を憐みて救ひ給へ、「アミン」。

誦経 [信経]

我信ず、一^{ひとつ}の神、父、全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を。又信ず一^{ひとつ}の主イイスス・ハリストス、神の独生の子、萬世^{よろずよ}の前に父より生れ、光よりの光、真の神よりの真の神、生れし者にて、造られしに非ず、父と一體にして、萬物彼に造られ、我等人人の為、又我等の救の為に天より降り、聖神^{うま}及び童貞女マリヤより身を取り、人と為り、我等の為にポンティ・ピラトの時十字架に釘うたれ、苦^{くるしみ}を受け、葬られ、第三日に聖書に應ひて復活し、天に上り、父の右に坐し、光榮を顯して生ける者と死せし者とを審判する為に還來り、其國終^{また}なからんを。又信ず、聖神^{その}、主、生^{おわり}を施す者、父より出で、父及び子と共に拜まれ、讃められ、預言者を以て嘗て言ひしを。又信ず一^{ひとつ}の聖なる公^{おおやけ}なる使徒の教會を。我認む一^{ひとつ}の洗禮、以て罪の赦^{ゆるし}を得るを。我望む死者の復活、並に來世の生命を、「アミン」。

(1 句目は司祭に続いて全文繰り返す)

司祭 全文を歌う「至聖なる女宰生神女よ、我等罪人の為に祈り給へ。」

(詠) 至聖なる女宰生神女よ、我等罪人の為に祈り給へ。



(司祭に続いて、繰り返す)

司祭 聖天使及び天使首の全軍よ、我等罪人の為に祈りたまへ。

司祭 聖預言者イオアン、吾が主イイスス・ハリストスの前驅授洗よ、我等罪人の為に祈りたまへ。

司祭 光明なる聖使徒、預言者、致命者、及び諸聖人よ、我等罪人の為に祈りたまへ。

司祭 克肖捧神なる我が諸神^{おの}父、全世界の牧者及び教師よ、我等罪人の為に祈りたまへ。

司祭 聖使徒大主教聖ニコライよ、我等罪人の為に祈りたまへ。

司祭 尊くして生命^{いのち}を施す十字架の敗られず量られざる聖なる力よ、我等罪人を離るるなかれ。

司祭 神よ、我等罪人を浄め給へ。

司祭 神よ、我等罪人を浄めて、我等を憐み給へ。



誦經 【聖三祝文】[至聖三者][天主經]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を^{いさぎよ}潔くせよ、主宰よ、我等の^{あやまち}愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、^{ことごと}悉く爾の名に^よ因る。

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」。

天に在す^{いま}我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧^{かて}を今日我等に^{こんにち}與へ給へ、我等に^{あた}債ある者を我等免すが如く、我等の^{おいめ}債を免し給へ、我等を^{いざない}誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 ^{けだし}蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に。

(詠) 「アミン」。

〔神現祭トロパリ〕 1 調

主よ、なんじが イオルダンに 洗を受くるとき

聖三者の 敬拝は 顕れたり けだし 父の こえ

爾を証して 至愛の子と名づけ 聖神も 鳩の形に ^{あらわれ}顕れて



誦経 主憐れめよ（40／12回）

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン、ヘルビムより尊くセラフィムに並びなく栄え、貞操をやぶらずして神ことばを生みし実の生神女たる爾を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 主イイスス・ハリストス我等の神よ、我が諸聖神父の祈祷によりて我等を憐れめよ「アミン」

誦経 【聖大ワシリイの祝文】

主よ、主よ、我等を昼の^{もろもろ}諸の流矢より脱れしめし者よ、我等を闇冥に行く^{くらやみ}諸の害より脱れしめ給へ。我が手を舉ぐるを^{くれ}晩の祭として受け給へ。我等に^{あやまち}過なく、悪に誘はれずして、夜の路を^{とお}過らしめ給へ。我等を悪魔より来たる^{もろもろ}諸の紛擾と畏懼より脱れしめ給へ。我等の霊に感動を^{あた}興へ、我等の心に畏るべき義なる爾の審判に^{こた}對ふべきことを慮らしめ給へ。我等の體を爾を畏る^{おそれ}畏に釘うち給へ、我等が地に在る肉慾を殺し給へ。我等が眠の靜なる時にも爾の^{いましめ}誠を見るに^よ因りて照さるるを得しめ給へ。我等より^{もろもろ}諸の妄想と害ある慾とを除き給へ。我等を祈祷の時に興して、我が信を固め、爾の^{いましめ}誠を行ふに進ましめ給へ、爾が独生子の慈憐と仁慈に^よ因りてなり。爾は彼と至聖至仁^{いのち}生命を施す爾の神^{とも}と偕に崇め讃めらる、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」。

誦経 来たれ、我等の王・神に叩拜せん。（叩拜一次）

来たれ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。（叩拜一次）

来たれ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。（叩拜一次）

誦経 第50聖詠

神よ、爾の大なる^{おお}憐に^{あわれみ}因りて我を^{あわれ}憐み、爾が^{めぐみ}恵の多きに^お因りて我の不法を^け抹し給へ。
^{しばしば}屢我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、^{けだし}蓋我は我が不法を知る、^{しん}私の罪は常に我が前に在り。我は^{ひとり}爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の^{しん}審斷に義

にして、爾の裁判に公^{おおやけ}なり。視よ、我は不法に於て^み生まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實^{しんじつ}のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯^{あらわ}せり。「イソップ」を以て我に^{そそ}洗^{しか}せば我^{いさぎよ}くならん、我を^{あら}滌^{しか}へ、然せば我雪より白くならん。我に^{よろこび}喜^{たのしみ}と^{ことごと}樂^しとを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の^{かんばせ}顔^しを我が罪より避け、我が^{ことごと}盡^しくの不法を抹し給へ。神よ、^{いさぎ}潔^しき心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改め給へ。我を爾の^{かんばせ}顔^しより逐ふこと母れ、爾の^{せいしん}聖神^しを我より取り上ぐる^{なか}こと母れ。爾が^{すくい}救^{ふけん}の^{よろこび}喜^しを我に還せ、主宰たる神^{しん}を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に帰らんとす。神よ、我が^{すくい}救^しの神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、^{けだし}蓋^し爾は祭を欲せず、欲せば我之を^{これ}獻^{たてまつ}らん、爾は^{やきまつり}燔祭^しを喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの^{じょうえん}城垣^しを建て給え、其時に爾義の祭、^{ささげもの}獻物^しと^{やきまつり}燔祭^しとを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に^{こうし}積^{そな}を奠へんとす。

<第 101 聖詠省略>

誦經 【イウデヤ王マナッシャの祝文】

主全能者、吾が先祖アウラアム、イサアク、イヤコフ、及び其義なる裔^{その}の神よ、爾は天地と其都ての^{そのすべ}飾^{かざり}とを作り、爾が^{いましめ}誠^{ことば}の言にて海を縛り、淵を閉ぢ、畏るべくして栄えたる爾の名を以て之を封印せり、萬物は其名を恐れ、爾が力の前に^{おのの}戦^{けだし}く、^{おごそか}蓋^し爾が^{おごそか}光榮^しの莊嚴なる前には誰も立つ能はず、罪人に於ける爾の厳しき怒は堪へ難し、然れども、爾が契約の憐は測り難く、窮め難し、^{けだし}蓋^し爾は仁慈にして寛忍、鴻恩にして人の罪惡を憂ふる至上の主なり。爾主よ、爾が仁慈の多きに依りて、爾の前に罪を犯しし者に痛悔と赦罪とを契約し、爾が慈憐の多きに依りて、罪人の為に痛悔を定めて救を得しめ給へり。故に爾主、義人の神よ、義にして爾の前に罪を犯さざりしアウラアム、イサアク、イアコフの為には痛悔を立てず、乃^{すなわち}我罪人の為に之を立て給へり、^{けだし}蓋^し我罪を犯ししこと海の^{まさご}砂^しの数よりも多し。主よ、我が不法は数へ難し、我が不法は数へ難し、我は不義の多きに^よ因りて、仰ぎて天の高きを見るに堪へず。我は多くの鐵の鎖にて屈められ、我が^{かが}首^{こうべ}を擧ぐる能はず、暫時も安んずる能はざるに至れり、^{けだし}蓋^し我は爾を^{いか}怒らせ、惡を爾の前に犯し、爾の旨に循はず、爾の命を守らず、穢れし事を行ひ、誘惑を多く為せり。今我が心の膝を屈めて、爾に仁慈を賜ふを祈る。主よ、我罪を犯せり、我罪を犯せり、我は我が不法を知る、然れども爾に祈りて求む、主よ、我を赦し給へ、我を赦し給へ、我を我が不法と共に亡す勿れ、永く我が惡を^{おも}念ふ勿れ、我を地獄に定むる勿れ、^{けだし}蓋^し神よ、爾は痛悔する者の神なり、爾の仁慈を傾けて我が上に顯し、爾の^{おお}大^いなる憐に^よ因りて我不當の者を救ひ給へ、我生ける^{うち}中^し爾を崇め讃めん、^{けだし}蓋^し天の衆軍は爾を讃め頌う、光榮は爾に世世に帰す、「アミン」。

誦經 【聖三祝文】[至聖三者][天主經]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神^{いつ}に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を^{いさぎよ}潔^しくせよ、主宰よ、我等の^{あやまち}愆^しを赦せ、聖なる者よ、^{のぞ}臨^いみて我等の病を癒し給へ、^{ことごと}悉^しく爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」。

天に在^{いま}す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はる
るが如く地にも行はれん、我が日用の糧^{かて}を今日我等に與^{こんにち}へ給へ、我等に債^{あた}ある者を我等免^{おいて}す
が如く、我等の債^{おいて}を免し給へ、我等を誘^{いざない}に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋^{けだし}国と権能と光荣は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に。

(詠) 「アミン」。

(詠) [コンダク]

コンダク 4調

主よ、爾は今日 世界に現われ 爾の光は我等に印されたり

我等爾を承け 認めてうたう 近づき難き ひかりよ

爾、来たり、爾現れたまえり

誦経 主憐めよ。(40次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」。

ヘルウィムより尊く、セラフィムに並^{ならび}なく栄え、貞操^{みさお}を壊^{やぶ}らずして神言^{かみことば}を生みし実の生
神女たる爾を崇め讃む。

神[°] 父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 主イイスス・ハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈祷に依りて我等を憐めよ。

誦経 「アミン」。

誦経 [祝文]

主宰神^{かみちち}父全能者、主独生の子イイスス・ハリストス、及び聖神[°]、惟一^{ゆいいち}の神性、惟一^{ゆいいち}の能力
よ、我罪人を憐み、爾が知る所の法を以て我不當の僕を救ひ給へ、蓋^{けだし}爾は世世に崇め讃め

らる、「アミン」。

誦経 来たれ、第69聖詠、第142聖詠

誦経 至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵^{めぐみ}臨^{おおい}めり。主天の王、神・父全能者よ、主独生の子イイスス・ハリストス、及び聖神^よ、爾の大なる光栄に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の^{こひつじ}羔^よ、父の子、世の罪を任^{にな}ひし者よ、我等を憐み給へ、世の^{もろもろ}諸^{にな}の罪を任^{にな}ひし者よ、我等の^い禱^いを納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は独り聖なり、爾は独り主イイスス・ハリストス、神・父の光栄を顕す者なればなり、「アミン」。

我^{やや}夜^や夜に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。

主よ、爾は世世に我等の^{かくれが}避^{はし}所たり。我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が^い霊^いを^や醫^やし給へ、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に^{はし}趨^{はし}り附く、爾の旨を行ふを我に教^いえ給へ、爾は^{いのち}我の神、^{いのち}生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を^み觀^みん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給へ。

(詠) [リティヤのスティヒラ]

光を衣の如く衣る者は我等の為に我等に似たる者と為りて、今日イオルダンの流を衣る、自ら潔の為に之を求むるにあらずして、己を以て我等に復生を建てん為なり。嗚呼奇蹟や、ハリストス神我等の霊の救主は火を用いずして練り、毀たずして改め造り、彼に由りて光照せらるる者を救ひ給ふ。
惟一人を愛する主よ、授洗者は爾聖神^とと火とを以て世の罪を浄むる者の己に来るを見て、懼れ慄きてよびて曰へり、我爾の至りて潔き首に觸るるに堪へず。主宰よ、爾神聖なる爾の現にて我を聖にせよ。

リティヤのスティヒラ 4調

光を衣の如く 着るものは 我等のために
われらに 似たる 者となりて 今日イオルダンの流れを
衣 - る 自らきよめの為に これをもとむるに
あらずして 己を以て 我等に復生を建てん ため な - り
ああ 奇せきや ハリストス神 我等の 霊の 救主は
火をもちいずして練り こぼたずして改めつくり
彼に由りて光照せらるる者を 救いた ま - う。

[リティヤ]

輔祭 神や、爾の民を救ひ、及ビ爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、
正教の「ハリストティアニン」等の角を高くし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる
我等の女宰・生神女。永貞童女マリアの祈りと、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる
尊き天軍、光荣なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光荣にして讃美たる聖使徒、我等
の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金ロイオアン、我等
の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父全ロシアの奇蹟者ペトル、
アレキシイ、イオナ、フィリップ、我等の聖神父イルクーツクの主教・奇蹟者インノケン
ティ、光荣なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イ
オアキムびアンナ、聖某(本堂の聖人)及び悉くの聖人の轉達に因りて、大仁慈の主や、爾
に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、

(詠) 主憐めよ、(40 次) →12 回 (パニヒダと同じメロディで)

輔祭 又我が国の天皇、其及び国を司る者の為に禱る、

(詠) 主憐めよ、(30 次) →12 回

又教會を司る我等の(府)主教(某)、及ビハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為、凡
そ憂患困難にして神の憐と佑けとを要する「ハリストティアニン」の靈の為、此の聖堂と慎
みて此に来る者とを覆はんが為、全世界の安和と整齊との為、神の聖なる諸教會の堅立の
為、勉励と神を畏る心とを以て劬勞服役する我等の諸父兄弟を助け救はんが為、参拝する
を得ざる者と他出する者との為、病に臥す者を醫さんが為、已に過ぎ去りし悉くの我等の
父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の安眠・寛宥・福たる記憶・諸罪の赦免
の為、虜となりし者の救はれんが為、務を執る我等の兄弟、及ビ凡そ此の尊貴なる聖堂に
務むる者と嘗て務めし者の為に禱りて曰はん、

(詠) 主憐めよ、(50 次) →12 回

輔祭 又此の都邑(修道院に於ては此の聖修道院)凡の都邑と地方が、飢饉・疫病・地震・水難・火難・
劍難・外攻・内乱より護られ、我が善にして人を愛する神が仁慈と哀憐とを垂れて、凡そ
我等に臨む怒を遏め、其我等に逼る義なる罰より我等を救ひ、及び我等を憐むが為に禱る、

(詠) 主憐めよ、(3 次)

輔祭 又主・神が我等罪なる者の禱の声を聆き納れて、我等を憐むが為に禱る、

(詠) 主憐めよ、(3 次) (司祭祈禱に挙げる生者死者を黙念、)

司祭 (高声) 神我が救世主、地の四極と遠く海に居る者との恃や、我等に聞き給へ、主宰や、我
等の罪に慈憐を垂れ、慈憐を垂れて我等を憐み給へ、
蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光荣を爾父と子と聖神に献ズ、今も何時も世世
に、

(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも

輔祭 我等の首を主に屈めん、

(詠) 主爾に

(衆人首を屈めて地に俯す)

司祭 (高声) 主宰大仁慈なる主イイススハリストス我等の神や、至浄なる我等の女宰・生神女・
永貞童女マリアの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光荣なる尊き
預言者・前驅・授洗イオアン、光荣にして讃美たる聖使徒、光荣なる凱旋の聖致命者、克

竹捧神なる吾が諸神父、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者大ワシリイ、神学者グリゴ
 リイ、金口イオアン、我等の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父
 全ロシヤの奇蹟者ペトル アレキシイ イオナ フィリップ、我等の聖神父イルクーツク
 の主教・奇蹟者インノケンティ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、聖某
 （本堂の聖人の名を挙グ）及び爾が悉くの聖人の転達に因りて、我等の祈祷を聆き納れ、
 我等に罪過の赦を賜ひ、我等を爾が翼の蔭に覆ひ、諸の仇敵を我等より遠ざけ、我等の生
 命を平安ならしめ給へ、主や、我等と爾の世界とを憐み、并に我等の霊を救ひ給へ、爾は
 善にして人を愛する主なればなり、

（詠） アミン

【挿句のスティヒラ】第二調。（アナトリイの作）。

ハリストス神よ、イオアンはイオルダンの河に於て／爾が己に来るを見て曰へり、汚なき主よ、何為れぞ僕に來りし。我誰の
 名に因りて／爾に洗を授けん、父に因らんか、爾之を己の中に有つ。子に因らんか、爾人體を取りし者自らはなり／聖神[°]に
 因らんか、爾之をも口を以て信者に予ふるを知る。現れたる神よ、我等を憐み給へ。



ハリストス か み よ、イオアンは イオルダンの かわにおい - て

爾が 己に来たるを見て 曰えり、 汚れ なき 主 - - よ

何すれぞ僕に 来たり - し 我 誰の 名に 因りて

なんじに 洗を さず けん、 ちちに よらんか

爾これを己のうちに たも - つ 子によらんか

爾 人体を取りし者自らこれな - - り 聖 神 に よらんか

爾これをも 口を持って信者に 与うるを 知 - - る

現れ たる か み よ、 我等を 憐れみた ま - え

句、海は見て走り、イオルダンは後へ退けり。

神よ、水は爾を見、水は爾を見て懼れたり、蓋ヘルウィム等も爾の光榮を直に視る能はず、セラフイム等も之に目を注ぐを得ず、唯畏懼を以て前に立ちて、或者は爾を戴き、或者は爾の力を讃榮す。仁慈の主よ、我等も彼等と偕に爾の讃美を唱へて言ふ、現れたる神よ、我等を憐み給へ。

句、海よ、爾何事に遭ひて走りしか、イオルダンよ、爾何事に遭ひて後へ退きしか。

今日天地の造成主は肉體を以てイオルダンに來り、罪なき者にして洗禮を求む、世界を敵の誘惑より淨めん為なり。萬有の主宰は僕より洗を受けて、水に由る潔淨を人類に賜ふ。我等彼に呼ばん、現れたる我が神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、第六調。(フェオフアの作)。

産まざる者より出でし光明なる燈は、童貞女より出だたる日のイオルダンに於て洗を求むるを見て、畏れ且喜びて彼によべり、主宰よ、爾は神聖なる爾の現にて我を聖にせよ。

(詠)シメオンの祝文 (キエフのメロディから)

主 宰よ、 いま ^{なんじ} 爾 の ことばに ^{した} 従 がいて、
^{なんじ} 爾 の 僕をゆるし 安然と してゆか しーむ。
蓋 我が 目は ^{なんじ} 爾 の ^{すく} 救 いを 見たり、
なんじが 万民の前に そなえしもの なり。
是れ 異邦人を照らす ひ か り、
^{およ} 及び ^{なんじ} 爾の民 イズライリの ^{さかえ} 榮 な り。

誦經 [聖三祝文][至聖三者][天主經]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神^{いつ}に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を^{いさぎよ}潔くせよ、主宰よ、我等の^{あやまち}愆を赦せ、聖なる者よ、^{のぞ}臨みて我等の病を癒し給へ、^い悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」。

天に在^{いま}す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はる
るが如く地にも行はれん、我が日用^{かて}の糧^{こん}を今日^{にち}我等に與^{あた}へ給へ、我等に^{おいめ}債^{ある}者^をを我等免^{ゆる}す
が如く、我等の^{おいめ}債^{ゆる}を免し給へ、我等を^{いざない}誘^なに導かず、猶^な我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭^{けだし} 蓋^{けだし} 国と権能と光栄は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

〔神現祭トロパリ〕 1 調 (3 回)

主よ、なんじが イオルダンに 洗を 受くるとき

聖三者の 敬拝は 顕れたり けだし 父の こえ

爾を証して 至愛の子と名づけ 聖神も 鳩の形に^{あらわれ} 顕れて

^{ことば} 言の確かなるを示せり。 あらわれて 世界を 照らしし

ハリストス か み よ 光栄は なんじに 帰す。

司祭 主に祈らん

(詠) 「主、憐れめよ」

司祭 主イイススハリストス我等の神、五餅に福を降ろして五千人を飽かしめし・・・

(詠) 「アミン」

「願わくは 主の名は 崇め讃められ 今より 世々に至らん」 3 回

司祭 [発放詞] 願わくは主の降福は、其の恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世々に

(詠) 「アミン」

早 課

至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵み臨めり。(3 回)

我が唇を啓けよ、しかせば爾の讃美をあげんとす。(2 回)

【六段の聖詠】

【第 3 聖詠】

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が^{たましい}霊を指して、彼は神より救いを得ずと云ふ。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり、爾は我が^{こうべ}首を挙ぐ。我が^{もつ}声を以て主に呼ぶに、主はその^{せいざん}聖山より我に聴き給ふ。我臥し、寝ね、又覚む、主は我を^{ふせ}扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる万民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給へ、蓋爾は我が^{しよてき}諸敵の^{ほお}頬を^う批ち、^{くじ}悪人の^{くじ}齒を折けり。救いは主に依る、爾の^{こうふく}降福は爾の民に在り。我臥し、寝ね、又覚む、主は我を^{ふせ}扞ぎ衛ればなり。

【第 37 聖詠】

主よ、爾の^{いきどお}憤りを以て我を責むる^せ母れ、爾の^{なか}怒りを以て我を罰する^{もつ}母れ、蓋爾の^{なか}矢は我に^さ刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の^よ怒りに依りて我が^{いた}肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が^{こうべ}不法は我が^{あふ}首に^{おもに}溢れ、^{ごと}重任の如く我を^む圧す、我の^む無智に依り我が^{くさ}傷腐れて且つ臭し。我屈まりて^か仆れんとし、^{たお}終日憂ひて行く、蓋我が^{けだし}腰は熱に悩まされ、我が^{いた}肉に傷まざる所なし。我力^{おとろ}衰えて痛く^{つか}憊れ、我が^さ心の裂くるによりて^{さけ}號ぶ。主よ、我が^{ことごと}悉くの願いは爾の^あ前に在り、我が^{なげき}歎息は爾に^{かく}隠るるなし。我が^{おのの}心は戦い^き栗き、我が^ぬ力は我より脱け、我が^{すで}目の光も已に我にあるなし。我が^{とも}朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が^{いと}親戚は遠ざかりて立つ。我が^{いのち}生命を^{もと}覓むる者は^{あみ}網を^{もう}設け、我を^{そこな}害わんと欲する者は我が^{ほろび}淪亡のことを言いて、^{はかりごと}毎日^{たく}悪しき^{しか}謀^{みみしい}を^{ごと}圖む、然れども我は^き聲の如く聴かず、^{おうし}唾の如く己の口を^{ひら}啓かず、是に於て我は^{ここ}聞くなく、その^{おい}口に^{ごと}答うる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を^{けだし}待む、主我が^{たの}神よ、爾^き聴き給わん。我言えり、願はくは敵は我に^{つまづ}勝たざらん、我が^{つまづ}足の^は踏く時、彼等は我に向いて^{ほとん}誇り^{たお}高ぶる。我^{うれい}殆ど^は仆れんとす、我の^は憂は常に我が前に在り。我は我が^{はなはだかなし}不法を認め、我が^{いよいよ}罪の^{ゆえ}為に甚^{にく}哀む。我が敵は生きて^{ますます}愈強く、故なくして我を疾む者は益多し、

悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従うに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つ
る母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來たりて我を救ひ給え。主我が神よ、我を
遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來たりて我を救ひ給え。

【第62聖詠】

神よ、爾は我の神なり、我暁より爾を尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我が身は空しくし燥
ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん為なり、我が曾て爾を聖所
に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇
め讚め、爾の名に依りて我が手を挙げん。我が靈の飽かさること脂油を以てするが如く、
我が口飲みの声にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思う時に在り。蓋爾は我の
扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。
彼の我が靈を害はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃にかかりて、狐の獲物
とならん。惟王は神の為に樂しまん、凡そ彼を以て誓ふ者は譽れを得ん、蓋いつわりを言ふ
者の口は塞がれんとす。夜更に爾を思ふ、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ば
ん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。（3次）

<以下、87, 102, 142 聖詠省略>

【大連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、（詠）主 憐めよ
輔祭 上より降る安和我等が靈の救いの為に主に禱らん、
輔祭 全世界の安和神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に禱らん
輔祭 此の聖堂、及び信と慎みと神を畏る心とを以て此に來る者の為に主に禱らん、
輔祭 教会を司る我等の主教（某）、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆
人の為に主に禱らん、
輔祭 我が国の天皇及び国を司る者の為に主に禱らん、
輔祭 此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中に居る者の為に主に禱らん、
輔祭 氣候順和、五穀豊饒、天下泰平の為に主に禱らん、
輔祭 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、虜となりし者、及び彼等の救い
の為に主に禱らん、
輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが為に主に禱らん、
輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人と
を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリスト
ス神に委託せん、

（詠）主 爾に

司祭 (高声) 蓋凡そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、 (詠)「アミン」

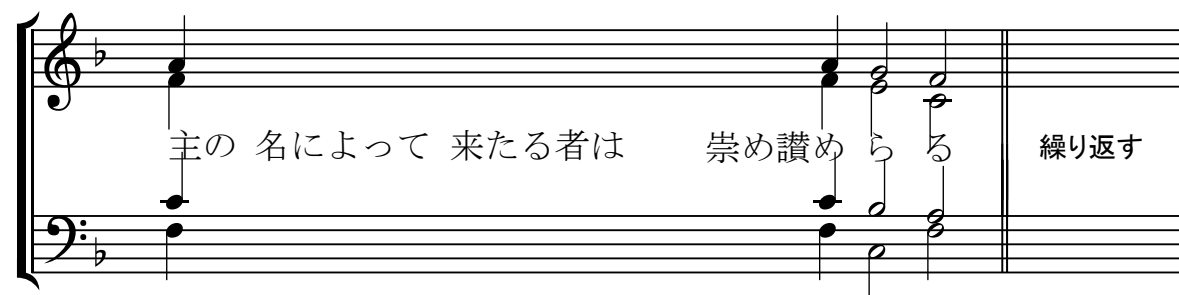
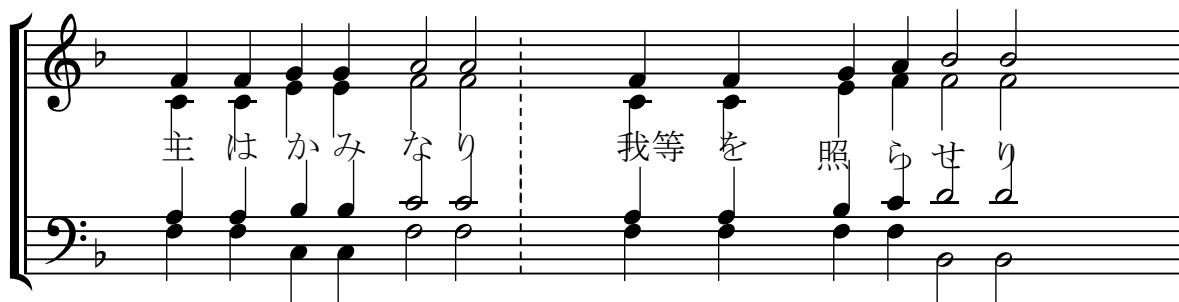
【主は神なりとトロパリ】 日本では3回だが、本来は下記の句に続いて4回。第4句に続いてトロパリ。

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、「主は神なり…」

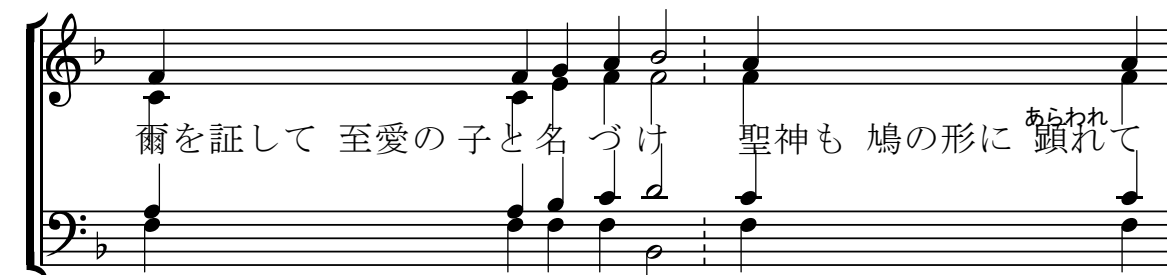
(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、「主は神なり…」

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、「主は神なり…」

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、「主は神なり…」



(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



ことば
言の確かなるを示せり。あらわれて 世界を 照らしし

ハリストス かみよ 光栄は なんじに 帰す。

【ポリエレイ】 (多油祭) (第 134 聖詠-135)

選択 1

主の名をほめあげよ 主のよほくやほめあげよ

ア リルイヤーア リルイヤーア リルイヤー

イエルサラムにましますの主は シオンにあがめほめらる

ア リルイヤーア リルイヤーア リルイヤー

主をととみほめよ アリルイヤー リルイヤー

かれは仁慈_{ジンジ}にしてそのあわれみは世世にあれば

なりアリルイヤ 天のかみをととみほめよ

アリルイヤア リルイヤそのあわれみは世

世にあれば なりアリルイヤ

選択 2

主の名を賛め揚げよ（六番）

主_{しゅ}の名_なをほめあげよ 主_{しゅ}の諸_{しよ}僕_{ぼく}やほめあげよ アリルイヤ

アリルイヤア リルイヤ イエルサリムに在_ましますの

主_{しゅ}はシオンにあげほめらる

アリルイヤ

主_{しゅ}を尊_{たう}とみほめよかれは



讃歌

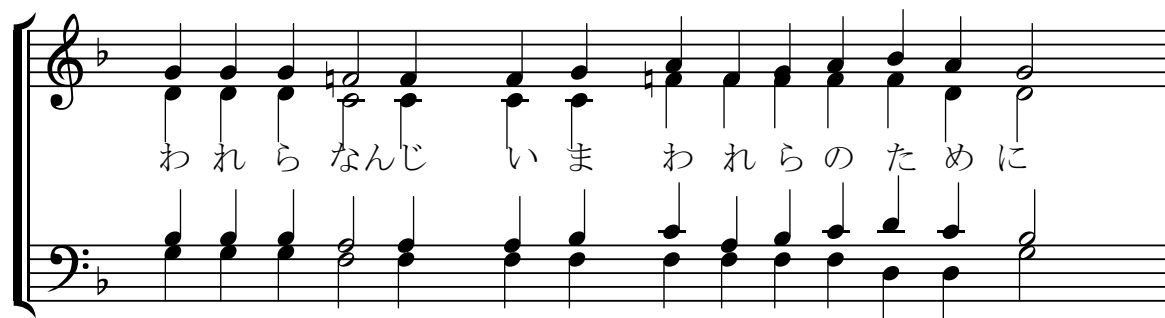
生命を賜ふハリストスよ、我等爾今我等の為に身にてイオアンよりイオルダン水に洗を受け給ひし主を讃揚す。

次ぎて同詠隊又歌ふ。

右、神よ、我等を憐み、我等に福を降し、

左、爾の顔を以て我等を照し給へ。

右、目を挙げて彼を仰ぐ者は照されたり、



身 に て イ オ アン よ り イ オ ル ダ ン の み ず に

洗 を 受 け た ま い し 主 を 讃 - - - 揚 - す

【小連祷】

【アンティフォン】 4 調 （祭日は歌う）

我が 幼き と-き- より 多くの欲は 我を 攻む

救世主や なんじ み-ず から 我を守り 防ぎて 救いた まえ

シオン を、にくむ もの や、 主よりはじを受け よ

くさ の 火に 焼かる るが ご とく なんじも つく されん

光 えいは ちちと子と 聖神 に 帰す



ポロキメン、第四調。

海は見て走り、イオルダンは後へ退けり、句、海よ、爾何事に遭ひて走りしか、イオルダンよ、爾何事に遭ひて後へ退きしか。



輔祭 主に祷らん、 (詠) 主、憐れめよ

司祭 (高声) 蓋我が神や、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、
今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

司祭 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、 (詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(まっすぐ)

司祭 (句) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(まっすぐ)

司祭 凡そ呼吸ある者は (詠) 主を讃め揚げよ、

司祭 我等に聖福音經を聴くを賜うを主・神に祷らん、 (詠) 主憐めよ (3次)

輔祭 睿智肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭 衆人に平安、 (詠) 爾の神にも、

司祭 (某) 伝の聖福音經の読み、 (詠) 主や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、

福音經はマルコ二端。

【第五十聖詠】

光栄は父と子と聖神に帰す、

第二調。萬有は今日喜ぶべし、ハリストスはイオルダンに現れ給へり。

今も何時も世々にアミン

第二調。萬有は今日喜ぶべし、ハリストスはイオルダンに現れ給へり。



光栄は父と子と 聖神に 帰-す 万有は今日 ^{よろこ} 慶ぶ べし

ハリストスはイオルダンに 現れ た ま え り

い ま も 何 時 も 世 世 - に ア ミ ン 万有は今日 ^{よろこ} 慶ぶ べし

ハリストスはイオルダンに 現れ た ま え り

次ぎて讃頌、第六調。（「天の王」のメロディで）



神の言は身を以て人間にあらわれ洗を受けんとしてイオルダ
^{カミ コトバ ミ モツ セン}

に立^タて り ぜんくは彼れにい え り 如何ぞ我れ手を
^{イ カン}

の べて 万物をたもつもののいただきにふれん や
^{バンブツ}

汝 マリヤより生まれしものと言えどもわれなんじが

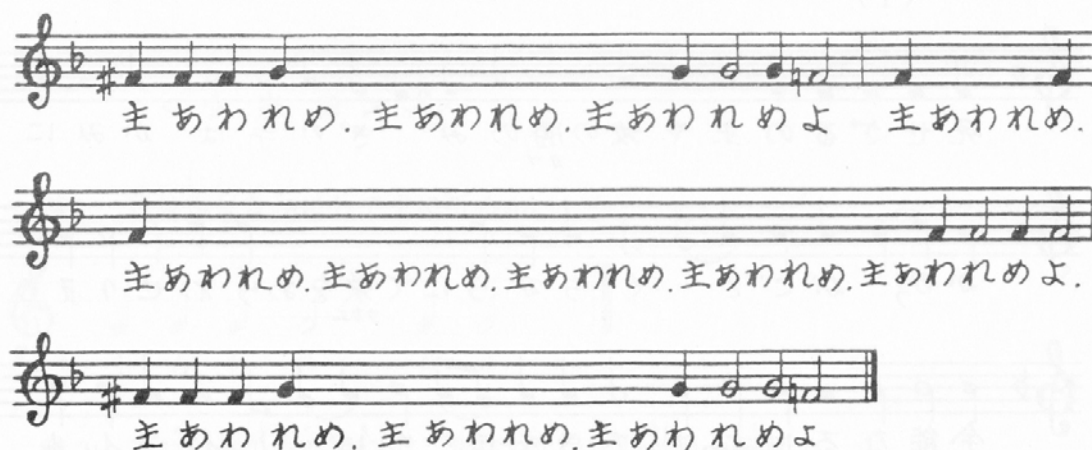


輔祭 神や、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリストイアニン」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女。永貞童女マリアの祈りと、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光荣なる尊き預言者・前駆・授洗イオアン、光荣にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金ロイオアン、我等の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父全ロシアの奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、我等の聖神父イルクーツクの主教・奇蹟者インノケンティ、光荣なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキムびアンナ、聖某(本堂の聖人)及び悉くの聖人の転達に因りて、大仁慈の主や、爾に求む、我等罪人爾に俦る者に聆き納れて、我等を憐めよ、

(詠) 主憐めよ、12 次

(高声) 爾が独生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」



カノン 第2調 <規程二篇 第二の規程略>

第一の規程、修士コスマ師の作。其冠詞は、洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり。第二調。

第一歌頌

イルモス、戦に能力ある主は深處の底を闢きて、己の人々を乾ける地に導き、敵軍を其中に掩ひ給へり、彼光榮を顕したればなり。

イルモス 1



(冠詞) 洗礼は地に生るる者の諸罪の潔めなり

世世の王たる主はイオルダンの流を以て朽ちたるアダムを新にし、彼處に住む蛇の首を砕き給ふ、彼光榮を顕したればなり。

(冠詞) 洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

童貞女より身を取りし主は神性の形なき火に形ある身を衣て、イオルダンの水に覆はれ給ふ、彼光榮を顕したればなり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

主は神の性を変えずして、甘じて人々と同じき者となり、彼等の為にイオルダンに浄められて、彼等のけがれを洗ひ、くらやみにある者を照し給ふ、彼光榮を顕したればなり。

第三歌頌

イルモス、我が諸王に能力を與へ、己の膏せし者の角を高くする主は、童貞女より生れて、洗禮の為に來り給ふ。我等信者は彼によばん、我が神と侔しく聖なるはなし。

イルモス 3

我が諸王に ちからをあたえ

おのれの 膏^{あぶら}せられし者の角を 高くする 主 - - - は

童貞女より 生まれて

洗礼の ために 来たり たまう

われら信者は かれに呼ばん

我が神と ひとしく 聖なるは なし

（冠詞）洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

さきに妊まずして、子なきを憂ひたるハリストスの教会は今楽しみ、蓋水と聖神^よとに藉りて爾に諸子は生れたり。彼等信を以てよぶ、我が神とひとしく聖なるはなし。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

前駆は野に於て声を揚げて呼ぶ、ハリストスの為に道を備へ、我が神の為に径^{みち}を直くせよ、且つ信を以てよべ、我が神とひとしく聖なるはなし。

應答歌、第五調。（省略）

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾の聲、爾が野に呼ぶ聲と名づけし者を聞けり。爾が多水の上に轟きて、爾の子の事を證せし時、彼は現れし聖神^よに満てられて?べり、爾はハリストス、神の智慧と能力なり。

イルモス 4

主よ、我 爾の声、爾が野に呼ぶ声と名付けしし者を聞けり

なんじが 多水の 上にとどろきて

爾の子のことを証せしとき

彼は現れし 聖神に満てられて呼べり

爾はハリストス、神の知恵と ちからなり

(冠詞) 洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

伝道者呼びて曰ふ、誰か本性に由りて光れる日を磨くを見たる、如何ぞ我水を以て爾光荣の光、永在の父の像たる者を洗はん、如何ぞ我草にして、爾が神性の火に觸れん、蓋爾はハリストス、神の智慧と能力なり。

(冠詞) 洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

モイセイは爾に邇づきて、抱きたる聖なる敬しみを顕せり、蓋彼は爾が棘より宣ふを覚りし時、たちまち其そ面を避けたり。我は如何ぞ顕れに爾を見、或はは手を爾に按せん、蓋爾はハリストス、神の智慧と能力なり。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

我は智識ある霊と言の尊き才能とを有ちて、霊なき者に耻づ、蓋若し我爾に洗を施さば、火にて烟れる山、両に分れたる海、退きたる斯のイオルダン是我を罪せん、蓋爾はハリストス、神の智慧と能力なり。

第五歌頌

イルモス、生命の首たるイイススは始めて造られしアダムの定罪を釋かん為に來り、神なるに由りて潔淨を要めずして、陥りし者の為にイオルダンに潔められ、彼處に仇を殺して、凡の悟に超ゆる平安を賜ふ。

イルモス5

いのちのかしらたる イイス-スは

始めて造られしアダムの 定罪を とかんために来た-り

神なるによりて きよめを もとめ ずして

陥りし者のために イオルダンに きよめら--れ

かしこに 仇をころして

凡その悟りに 超ゆる 平 安 を た ま - ら

（冠詞）洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

無数の人々がイオアンより洗を受けん為に集まりし時、彼は其中に立ちて之に呼べり、不順の者よ、誰か爾等に将来の怒を避くることを示したる。ハリストスに合ふ果を結べ、蓋彼は今現れて平安を賜ふ。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

農夫たる造物主は衆人の中に、彼等と等しき者の如く立ちて、其心を試し、手に箕^みをとり、睿智を以て世界の禾場^{うちば}を浄めて、実を結ばざる者をやき、実を結ぶ者に永生を賜ふ。

第六歌頌

イルモス、言の聲、光の燈臺、日の暁たる前駆は野に於て萬の人に呼ぶ、悔改して預め己を浄めよ、蓋視よ、世界を壊より拯ふハリストスは茲に立ち給ふ。

イルモス 6



(冠詞) 洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

前駆の教ふる如く、その革帯の、すなわち言が我等より受けし合性の解き難きハリストスは不朽に神・父より生れて、汚れなく童貞女より身を取り給ふ、地に生るる者を迷より救はん為なり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

ハリストスは滅亡の火を以て、抗敵して彼を神と承け認めざる者を洗し、聖神^oの恩寵を以て、水に藉りて、彼の神性を承け認むる者を新たにして、諸罪より救ひ給ふ。

小讃詞、第四調。

主よ、爾は今日世界に現れ、爾の光は我等に印されたり、我等爾を承け認めて歌ふ、近づき難き光よ、爾来り、爾現れ給へり。

第七歌頌

イルモス、露を含む鳴れる風と神の使の降臨とは、火の爐に在りし敬虔の少者を傷はるるなく守れり、故に彼等は焰の中に涼しくせられ、感謝して歌へり、讃美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

イルモス 7

つゆ を含む 鳴れる か ぜ と

かみ の 使い の 降 臨 と は

火の炉に在りし 敬 虔 の 少 者 を

傷なわるるなく まもれ - り

故に彼らは炎のうちに すずしく せられ

感謝 して うた え り 讃美たる主、先祖の かみよ

爾は あがめ 讃 め ら る

（冠詞）洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

天使の軍は天に於けるが如く、戦き驚きてイオルダンに立ち、神のかくの如き寛容をうかがへり、如何にして彼、天上の水の合成を其手に保つ主、我が先祖の神は、肉体にて水中に立ち給へる。

（冠詞）洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

古の民は旅する時、立法者に因りて雲と海とに洗を受けたり、斯の二の者は神聖なる洗礼の機密を預象せり、海は水を像り、雲は聖神[°]を像れり。我等此に成聖せられて?ぶ、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

我等衆信者は誰に依りて成聖を受けしかを敬みて宣ぶる時、諸天使と偕に黙さずして父と子と聖神[°]とを讃栄せん、蓋これ位に於て三者にして、一体なる唯一の神なり。我等彼に歌ふ、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、ワフィロンの爐は露を注ぎて、至榮なる秘密を像れり、此れイオルダンが其流に形なき火を承けて、身にて洗せらるる造物主、人々が崇めて萬世に讃め揚ぐる者を囲まんことなり。

イルモス 8

バビロンの^{いろり}炉は露をそそぎて

至榮なる秘密をかたどれり

これイオルダンその流れに形なき火を受けて

身にて洗せらるる造物主

人々があがめて

万世に讃め揚ぐる者を 囲まんことなり

（冠詞）洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

贖罪主は前驅に謂へり、一切^{おそれ}畏懼を棄てて我に順へ、我性に因りて善なる者に近づけ、我が命を聴きて、我降りし者、人々が崇めて萬世に讃め揚ぐる者に洗を授けよ。

（冠詞）洗礼は地に生るる者の諸罪の潔なり

授洗者は主宰の言を聞き、戦きて手を伸ぶ、然れども己の造成主の頂きに^ふ觸れて、洗を受けし者に呼べり、我を聖にせよ、蓋爾は我の神、人々が崇めて萬世に讃め揚ぐる者なり。

父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々にアミン

イオルダンに於て聖三者の顕現はありき、蓋神の本性たる父は呼べり、此の洗を承受くる者は我の至愛の子なりと、聖神^ろも己と侔しき者、人々が崇めて萬世に讃め揚ぐる主と偕に在せり。

第九歌頌 「ヘルウィムより尊く」を歌はずして、祭日の附唱を歌ふこと左の如し。

我が靈よ、天軍より尊き童貞女、至浄なる生神女を讃め揚げよ。

イルモス、生神女よ、爾の位に合ひて能く爾を讃美する舌なし、天上の智慧も如何に爾を歌頌するを知らず。唯爾、仁慈の者として、我等の信を納れ給へ、我等の熱切なる愛を知ればなり、蓋爾は「ハリスティアニン」等の轉達なり、我等爾を崇め讃む。

1ルモス 9

我がたましいよ 天軍より尊き 童 貞 女

至浄なる 生神女を 讃めあげよ 生神女よ

爾の位に合いて よく爾を賛美する 舌な - - - し

天上の 知恵も いかに 爾を歌頌するを知ら - - - ず

ただなんじ 仁慈の ものとして

我等の信を 入れたま - え

我等の 熱切なる 愛を 知ればな - り

我が霊よ、前駆に洗を求むる主を讃め揚げよ。

我が霊よ、イオルダンに洗を受けん為に來りし主を讃め揚げよ。

ダウィドよ、神^oを以て光照せらるる者に來りて、歌ひて云へ、今神に就きて、信を以て光照せられよ、蓋此の貧しき者たる陥りしアダム呼びたれば、主は之を聆き、來りて、イオルダンの流を以て朽ちたる者を新にし給へり。

我が霊よ、父の聲にて證せられし者を讃め揚げよ。

我が霊よ、三者の一、首を俯して洗を受けし者を讃め揚げよ。

イサイヤ曰く、己を洗ひ、己を潔くせよ、主の前に作す所の惡を棄てよ、渴く者は活水に往け、蓋ハリストスは信を以て之に就く者に活かす水を灑ぎ、聖神^oを以て老いざる生命の為に洗す。

預言者よ、我に來れ、手を伸べて、急に我を洗せよ。

預言者よ、今姑くせ、我が望に依りて我を洗せよ、蓋我は凡の義を盡さん為に來れり。

信者よ、願はくは聖神^oの恩寵と印とは我等を護らん、蓋昔エウレイ民が櫛に血の塗られし時に、亡より救はれし如く、斯く我等の為にも此の神聖なる復生の洗は救と為らん、之に因りて我等は三者の入らざる光を觀るを得ん。

【小連禱】

「凡そ呼吸ある者」とスティヒラ (スティヒラは省略)



今も、第二調。作者同上。

今日ハリストスは洗を受けん為にイオルダンに來り、今日イオアンは主宰の頂に捫る。天の軍は至榮なる秘密を見て驚き、海は見て走り、イオルダンは見えて退けり。我等は照されてよぶ、現れて地上に見られ、世界を照しし神に光榮は歸す。





【大頌栄】

司祭 光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す、

♪ 至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵み臨めり。)



1. 主 天の王、神・父 全能者よ、主 ^{どくせい}独生の子イイスス・ハリストス、及び ^{せいしん}聖神よ、



<以下同様に A B 繰り返して歌う>

2. 爾の大なる光栄に^よ因りて、我等 爾を崇め、爾を^{ほあ}讃め^あ揚げ、

爾を伏し拜み、爾を尊み^{うたひ}うたひ、爾に 感謝す。

3. 主 神よ、神の ^{こひつじ}羔、父の子、世の罪を任ひし^{にな}者よ、我等を 憐み^{あはれ}給へ、

世の ^{もろもろ}諸の罪を任ひし^{にな}者よ、我等の^{いの}禱りを ^い納れ^{あはれ}給へ。

4. 父の右に坐する^者よ／、我等を 憐み給へ。
5. 爾は独り^聖なり／、爾は独り主^{ひと}イイスス・ハリストス、神・父の光栄を 顯す者なればなり、「アミン」
6. 我 日々に 爾を 讃め^ほ^あ揚げ／、爾の名を 世世に 崇め歌はん。
7. 主よ、我を^守り／ 罪なくして この日を ^{わた}度らせ給へ。
8. 主 吾が先祖の^神よ／、爾は 崇め^ほ讃められ 爾の名は 世々に 尊み歌わる「アミン」。
9. 主よ、爾を^{たの}恃むに^因つて／、爾の 憐みを 我等に 垂れ給へ。
10. 主よ、爾は 崇め^ほ讃めらる／、爾の ^{いまし}誠めを我に ^{おし}訓へ給へ。(3次)
11. 主よ、爾は ^世世／ 我等の 避所たり。
12. 我曾て ^言へり／、主よ、我を憐み／、
我が ^{たましい}靈を ^{いや}醫し給へ／、我 罪を 爾に 得たればなり。
13. 主よ、爾に^{はし}趨り^つ附く／、爾の旨を行ふを 我に教へ給へ、
14. 爾は我の^神／、生命の源は 爾に在ればなり／、
我等 爾の光に^お於いて／ ^み光を觀ん。
15. 憐みを 爾を知る^者に／ 恒に 垂れ給へ。

【聖なる神】

【聖なる神】

聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、
我等を あわれめよ、 (3回繰り返す)
光栄は 父と子と 聖神に 帰す 今も何時も 世世にアミン
聖なる常生 のものよ、 我等を あわれめよ、
聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、
我等を あわれめよ、 「聖なる神…」 もう一度繰り返す
(スラブ語)
スヴィヤティイ ボジェ スヴィヤティイ クレプ キー スヴィヤティイベス メールトゥヌイ ポ ミ ルイ ナース

続いて

【祭日トロパリ】

ズナメニイ 1調

主よ なんじが イオルダンに 洗を受くる とき
聖 三者の 敬拝は あらわれ たり



【重連禱】

- 輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、(詠) 主憐めよ(3次)
- 輔祭 又我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、
- 輔祭 又教会を司る我等の主教(某)、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る、
- 輔祭 又ハリストスを愛する悉くの皇軍の為に禱る、
- 輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に禱る、
- 輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦を賜はんが為に禱る、
- 輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、
- 司祭 (高声) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

【増連禱】

- 輔祭 我等主の前に吾が朝の禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ
- 輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
- 輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ
- 輔祭 平安の神使正しき教導師、吾が霊体の守護者を賜はんことを主に求む

輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の霊に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む

輔祭 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む

輔祭 我等の生命の終が「ハリスティアニン」に適ひ、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき対をなすを賜はんことを求む

輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女まりやと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主爾に

司祭 (高声) 蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安、
(詠) 爾の神にも

輔祭 我等の首を主に屈めん、
(詠) 主爾に

司祭 (祝文を黙誦)、聖なる主、高きに居り卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を鑑る者や、我等心と体との項(くび)を爾の前に屈めて爾に捧る、爾が見えざる手を爾が聖なる住所より伸べて、我等衆人に福を降し給へ、我等に自由或は自由ならずして犯し罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦して、我等に今世来世の諸善を與へ給へ、
(高声) 蓋我が神や、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

輔祭 睿智
(詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に
(詠) 「アミン」神や、我が国の天皇と、正教会の教と、正教のすべてのハリスティアニン等を永く守り給へ、

司祭 至聖なる生神女や、我等を救ひ給へ、
(詠) ヘルビムより尊くセラフィムに並びなく栄え、貞操をやぶらずして神ことばを産みし実の生神女たる爾を崇め讃む、

司祭 ハリストス神我等の恃や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、
(詠) 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に「アミン」、主憐めよ(3次)福を降せ、

司祭 (發放詞) _____ハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、光栄にして讃美たる聖使徒聖某(本日聖人の名)及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり、
(詠) 「アミン」【萬寿詞】神よ、我が国の天皇を、及び国を司る者、我等の(府)主教及び悉くの正教のハリスティアニン等を 幾とせにも護り給え。

第一時課に

祭日の讃詞。

主よ、爾がイオルダンに洗を受くる時、聖三者の敬拝は顕れたり、蓋父の聲爾を證して至愛の子と名づけ、聖神[°]も鴿の形に顕れて言の確なるを示せり。現れて世界を照ししハリストス神よ、光榮は爾に帰す。

小讃詞、第四調。

主よ、爾は今日世界に現れ、爾の光は我等に印されたり、我等爾を承け認めて歌ふ、近づき難き光よ、爾来り、爾現れ給へり。